

言語学との関係

文明の衝突が叫ばれて久しい。世界は多様化の一途をたどり、様々な思想や価値観は、政治、経済、文化など全ての人間活動に影響を及ぼしている。まさに、現代は多文明的な世界であるといえよう。そして時には、文明と文明が接触し、摩擦や衝突が起きる。世界には無数の言語があり、ある言語とある言語の接触は必然的に起こりうる。人類は言語を媒体として異なる文明同士の折衷あるいは融合によって新たな歴史を切り開いてきた。それらの言語間接触の一形態が翻訳であり、その“はざま”で二言語を併用するのが翻訳者である。

この二言語の関係性に依拠する翻訳は、言語学と深くかかわっている。しかし、言語学は個別の言語「ラング」そのものを研究対象とするのに対し、翻訳はある言語で述べられるままとまり「パロール」を対象とする。つまり、二つの「ラング」間を行き来して「パロール」を運用する動的行為が翻訳である。言語学者として著名なジョルジュ・ムーナンは、『翻訳の理論』において、「翻訳の存在は現代言語学のスキャンダルだと言ってもよい程である。(中略) 翻訳活動は、現代言語学に理論上の問題を提起する。語彙、形態、統辞の構造に関する通説を受け入れるとすると、翻訳は不可能であるはずだと主張することになってしまふ。しかし翻訳者は存在し、生産し、われわれは彼等の生産物を有用に使っている」(ムーナン、1980:21)と述べ、翻訳不可能論について言及している。彼は、科学知としての言語学に取まりきらない翻訳の論理をどう扱うのかという点を鋭く指摘した。

この指摘は文学や詩の翻訳を考えると容易に理解できる。文学作品の翻訳は、単なる翻訳というよりも新たな文学作品を生み出す行為であり、それには文学者が必要である。詩の翻訳も同じで、詩人でなければ詩の翻訳は不可能である。翻訳者が、文節構造や押韻、語彙などを忠実に置き換えたとしても、それはもはや文学でも詩でもなくなる。日本語の語呂合わせなども、その意味を訳したとしても、語呂の持つ軽快な印象を移し替えることには限界がある。翻訳が技術や経験、センスといった非言語的な側面を有する営みであることはたしかである。

私が翻訳に従事し始めたころ、恩師であり先輩である方から、「辞書では翻訳はできない」と言われた。翻訳者は、言語間の“はざま”という非常に不安定な空間を行き来する旅人のようなものだ。たしかに、辞書からは何らかの示唆を得ることができるが、方角が定まらない磁石に頼って路頭に迷うように、時には辞書によって訳が迷走する結果にもなってしまう。翻訳はある言語の単語を別の言語の単語に置き換えるのではなく、原文のテキストを解釈し、その解釈を別の言語でテキスト化することを意味する。したがって、言語学の統辞論に基づき、記号と記号を置き換えるような形式は翻訳にはなじまない。

とは言いつつも言葉を扱う以上、翻訳は言語的な作業であり、言語学に基盤を持つ営みであることに違いはない。言語学に基盤を持ちつつも、それを超越していく作業が翻訳である。

この翻訳を三形態に分類したのがロマン・ヤーコブソンである。彼は『一般言語学』で、翻訳を「言語内翻訳」、「言語間翻訳」、

「記号法間翻訳」に分類している(ヤーコブソン、1993:57)。「言語内翻訳」は、あるテキストを同じ言語内において言い換えることを意味する。「言語間翻訳」は、あるテキストを起点言語から目標言語で表すことで、「記号法間翻訳」は、ことば、音、映像、絵画などを全て記号とみなし、ある記号を別の記号により表現することを指す。

この分類から考えると、彼の言う翻訳とは広義の翻訳であり、言語間翻訳が狭義の翻訳といえる。我々は言語内翻訳、つまり同じ言語内でテキストを言い換える作業を日常的に行っている。母親が子供に分かるように説く場合や、教師が難解な説明を簡略化しなおしたりする場合がまさにこれにあたる。

実はその技術は言語間翻訳の技術と類似する。言語内翻訳の延長線上に言語間翻訳を捉えるならば、翻訳は不可能ではなく、同一言語内で言い換えが可能であるように、言語をまたぐ場合でも可能であるということになる。

この翻訳可能論の基層となる概念は言語間言語学によって明らかとなっている。マリオ・ヴァンドルシュカは、人間の二言語併用、多言語併用性を起点とし、「個人の多言語併用の能力は究極において、人間の言語の多様性と軌を一にしている。」と指摘する(ヴァンドルシュカ、1974:175)。一個人がいわゆる母国語として話す言語内において、多種多様な言葉を時と場合、立場に応じて自然に使い分けている。それら一つひとつは絶対的で完全な言語というよりも、不完全な形で交錯し、互いに影響を及ぼし合っている。言語はあくまでも人間本位のものであり、母国語内において言い換え、つまり言語内翻訳を行っているという事実は、究極的には人類が共有する多言語併用能力の証左となりうると考えられる。

言語間言語学の行う翻訳の分析は人間の言語の真の性質を解明してくれる。すなわちそれは言語間相互の表現形式と構造の類似点と相違点を確認し、その中に含まれている人間の精神構造、体験と思考の構造の類似性と相違性を認識することを可能にする。(ヴァンドルシュカ、1974:186)

言語間言語学では、可能態として人類共通の一つの言語の存在を認め、それを普遍的なものとして仮定し、言語の普遍性から翻訳を扱っている。その視点からはより詳細に翻訳論を分析することができるであろう。翻訳の限界、不可能性を認識しつつも、互いに接触と融合を繰り返してきた現実態の諸言語を、網の目のように交錯しながら影響し合う一つの集合体としてマクロな視点から捉えなおすことにより、理想的な翻訳についてのさらなる検証が可能となる。そして、言語の普遍的な側面を照射することによって、この多文明世界において全人類が共有しうる新たな精神的素描を描き出すことができるかもしれない。

[引用文献]

- ジョルジュ・ムーナン (伊藤晃ほか訳)、『翻訳の理論』朝日出版社、1980年。
ロマン・ヤーコブソン (川本茂雄ほか訳)、『一般言語学』みすず書房、1993年第11版。
マリオ・ヴァンドルシュカ (福田幸夫訳)、『言語間言語学』白水社、1974年。